

## 「僕達の選挙戦」

(1987)

前号で岩瀬氏が「選挙活動」に触れておられたのを見て、我が事のように膝を叩いた。

86年、我等の職場「建築部」の部長が市会議員選挙に立つ事になった。我々部員はおろか、本社の従業員一同、市民各界も全く想像だにせぬ事だった。政治の世界からは程遠い、政治とはかけ離れた一建築技術屋が、本人の意思と関係なく、突然秘書室に呼ばれ出馬の業務命令を受ける事となつたのだ。本人の驚嘆振りは想像に難くないが、それより周囲の者たちの驚きは大変なものであった。

人口17万の宇都市の市会議員は当時36名で、その内当社から7人を送り出していた。今迄の例だとトップ当選で3000票少し、最下位で1500底々というのが当選ラインであった。7人の候補は今までの実績ではまず落選する等の例は皆無だが、どちらかというと社内での競争の方に興味が注がれていた。

半年前から選挙に備え、夫々関係の部署・子会社等の従業員の数を等分に割り振つての見事なシステムが伝統的に出来上がつていた。とはいへこちらにしてみれば、家族同然とも言える直属の上司である、当時課長だった僕は部員15名共々、このとんでもないの世界に半年間深入りする事になつた。社内の「その筋」の関係者から微に入り細に入り「この世界」のレクチャーを受け、選挙（後援会）事務所には、他部署の若

手・女子事務員等が手伝いに派遣され、又その筋のプロを自称する輩が出入りしては入れ知恵をしてくれていたが、何と言つても我々・建築家15名の精銳技術家集団は、他の部署と違つて強烈な同族・仲間意識があり、他部署の誰よりも「プロジェクト慣れ、人脈の広さ、企画力、組織作り、工程・スケジューリング、広報」等など、まさに選挙には必須とも言える天性を備えており、それらの動きには眼を見張るものがあった。今でこそ殆んどの選挙で「テーマカラー」を決めてのイメージ作戦は当たり前のようなになつたが、四半世紀前のこの選挙で我々はこれを全面的に実行し、ポスター、選挙カー、ユニフォーム、名刺・等を派手なオレンジカラーに染め上げた。当時はまだ建設業界も活況だつた事もあり、決起集会・激励大会・個人演説会等などの集客は他の候補を圧倒し、地区の会場や市の会館を溢れる程満員にした。ポスターの掲示、ウグイス嬢、車の運転手等は見事な連携。プレイ（チーム編成、スケジュール・仕様作り・訓練マニュアル作り等）を発揮した、特に公示後のポスター張り・終了後のポスター撤去は市内各所の掲示場所でもトップクラスに早かつたのは後々の評判になつた程だ。後援会作りも順調に進み、後援会名簿は1万名を超える勢いであつた。勿論この数字から、実際の数字を予想する事は至難の業だつた。他の候補者からは「国政選挙並みの動きだ・・・」とか「5千票位行くんじゃないか」とか、果ては、「少し取り過ぎの様だからこちらに回して欲しい・・・」とか散々言われた。

実際投票の数日前頃から各候補の電話作戦の中心が我方の後援者に対する「泣き落とし」に始まり、「票を譲ってくれ・・・」の戦術が中心となつた。早くから事務局でも、何となくこの不穏な動きには警戒を示していた。案の定、選挙は魔物、まさに最後の2日間と良く言われるが全くその通り、結果は2500票、全体では15位当選だったが、社内7人の内では5位であった。これが建築屋技術屋集団の限界なのか？

今から思えば、「携帯電話」と「パソコン」の未だ無い時代、膨大な後援会名簿の整理、各部隊との連絡・・・等など良くぞやり遂げたと感慨は大きい。

開票所に望遠鏡を持ちこみ、公衆電話に走り、そしてその日の深夜に半年間の苦労を吹き飛ばすような万歳三唱で全てが終わった。他部署から「派手過ぎた」、「泥臭さに欠けていた」と言われ、後援者からは「真面目にやりすぎた」、「飲む機会が少なかった」・・・好きな事を言う奴がたくさんいた。いつも事務所に立ち寄り、恩を売る振りをし、酒を無心していた小賢しい輩たち、或いはいつの間にか候補の昔の友達、遠い親戚・血縁になっていた不思議な輩たちもいつの間にかどこかへ姿を消してしまった。

(「お話はフィクションであり、文中登場する組織・団体・個人は全て架空のものである」とをお断り致します。)